

詩篇32篇1-5節 「罪赦された者」

1A 幸いなこと 1-2

1B 罪の覆い 1

2B 数えられない咎 2

2A 神の重い御手 3-4

3A 罪の告白 5

1B 隠すことの辛さ

2B 一瞬の赦し

本文

詩篇 32 篇を交読文で読みました。今朝は、1 節から 5 節に注目したいと思います。午後礼拝で、30 篇から 34 篇までを読みたいと思います。

ダビデがここで書いている内容は、私たちの基本的な必要、人間として生きていく上の根本的な必要に取り組んでいます。それは、「罪の赦し」です。人々は、本質的に罪意識で苦しんでいます。自分が過去に犯したことについて、誰からも咎められていなかったにしても、自分の心ではこんなことをしてしまったという強い後悔でいっぱいになっています。日頃の生活では、それがいないかのようにしているのですが、ふと何かがあると思ひ出します。過去に行ったことの罪が思い起こされて、自分を苦しめるのです。しかしダビデは、ここで罪赦された者としてその幸いを詩に書きとめています。「なんと幸いなことでしょうか、罪赦された者は！」と、歓喜の声を上げています。

ダビデを苦しめていた罪意識は、聖書を読んでいる人にはすぐに思い出す一大事件のことです。王である彼は、自分の部下ウリヤの妻バテ・シェバと姦淫の罪を犯したのです。しかも、その罪を隠蔽するために、夫ウリヤを殺しました。それは、ある夕暮れに起こりました。それは、ダビデが周囲の国々と数多くの敵と戦い、ようやく落ち着きが出てきたような時期でありました。アモン人が、自分たちの町ラバに立てこもり、そこを攻略すべく將軍ヨアブが出て行きましたが、ダビデ自身はエルサレムの王宮にいたのです。

それで夕暮れに起き上がり、屋上を歩いていました。すると女が自分の体を洗っているところを見たのです。それは非常に美しかった、とあります。それで使いを送って、その女を調べさせるとウリヤの妻であることが分かったのです。それが分かっているながら、彼は女を自分のところに連れてきて、彼女と寝たのでした。ちょっとした罪の楽しみを味わったのです。

けれども、神はそのままにさせませんでした。彼女は妊娠したのです。そのことを知ったダビデは、自分の罪がばれることを恐れ、ウリヤが家に戻って妻と寝て、それでウリヤの子であるように

ごまかそうとしたのです。それでアモンのラバから連れ戻されたウリヤは、ダビデの食事の席に招かれました。そしてその夜は妻のところに行きなさいと言いつけたのですが、なんとウリヤは王宮の門のあたりで、王の家臣たちと共に寝たのです。彼は、優秀で実直な兵士だったのです。イスラエルには神の箱があり、主君が戦場で戦っているのに、私だけが妻と寝るようなことはできないと言ったのです。

それで次の日も食事に誘い、酒で酔わせたのですが、帰りません。そこでダビデは、ヨアブに手紙を宛てました。アモン人との戦いで、激戦の真正面にウリヤを出し、彼を残して撤退しなさい、そして敵の手に彼を打たせなさい、という内容だったのです。その通りになりました。

ウリヤが死んだことを知ったバテ・シェバは悼み悲しみました。そして、ダビデが彼女を妻として迎え入れたのです。このことは、主のみこころをそこなった、とあります。当時、王が戦死した部下の妻をめとることは、慈悲深い行為でした。寡の身はとても苛酷でしたから、王の妻となることによってその後の生活保障となる側面がありました。ですから全て、何の問題もないかのように装うことができたのです。ところが、彼の心には日照りがきました。それが3-4節で彼が書いたことです。「3 私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。4 それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。」心がカラカラになりました。

その九か月後ぐらいでしょうか、主がナタンをダビデのところに遣わしました。ナタンは、ある話をしました。二人の人がいて、一人は貧しい人で、雌の子羊を一頭飼っていました。自分の娘のようにかわいがり、食べ物をいっしょに食べ、いっしょのところで寝たほどでした。もう一人は富んだ人ですが、彼の家に客がやって来たのですが、彼は自分の羊と牛の群れから調理するのを惜しんで、なんとその貧しい人の子羊を取り上げて調理したのです。それを聞いていたダビデは、激昂しました。「そんなことをした男は死刑だ。」そこでナタンが言ったのです、「あなたがその男です。」

その時にダビデは、主の前にひれ伏してこう言ったのです。「私は主に対して罪を犯しました。」そしてすぐにナタンは宣言しました。「主もまた、あなたの罪を見過ごしてくださった。」(2サムエル12:13)その罪の赦しの宣言を聞いたその喜びを5節で書きました。「私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。」この罪の赦しによって、ダビデは「幸いなことよ」と、安どと喜びの声を挙げているのです。

1A 幸いなこと 1-2

1-2節を見てください。「1 幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。2 幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。」幸いなことよ、という言葉から始めています。人が幸いと感じる時というのは、どのような時でしょうか？誰かが結婚して、披露

宴で人々は、「ぜひ末永く幸せでいてください。」という祝福の言葉を述べます。状況が良くなっていることが、自分に幸いをもたらすと考えています。幸せな家庭、環境の良い職場など、状況に拠っています。しかし、聖書の中で「幸いである」と出てくる時は、状況ではなく「人」に向けられます。その人の内なる姿勢が幸いを決めるのです。もっと具体的には、その人が主なる神との間でどのような関係になっているのかで決まってきます。

私たちは、その罪意識に苛む時に、行動に駆られます。その罪の責めを、強迫的に何かの行動によって代償しようとするのです。狂ったように仕事に取りかかってみたり、人々に親切にしてみようとしたり、何か遊びにふけてみたり、動いていないと済まなくなります。しかし、行いによっては決して罪意識を償うことはできません。唯一、罪にしたがって私たちを罰し、地獄に送る権威のある方が、それでも私たちを赦してくださることによって、罪の咎めから解放されます。そして、心に平安が来るのです。そして立ちどまって、ただ主に「幸いな人」とされているところに留まることができます。

1B 罪の覆い 1

ダビデは、自分の犯した罪について、三つの表現を使っています。一つ目は、「背き」です。これは、神の命令が何であるかを分かっているが、それでも背くという反逆や反発のことを話しています。主が語られていることがあります。それでも、「いや、私はこの道を選びます。」と言って反対のことは行ないます。もう一つは、「罪」です。罪の元々の意味は、「的を外す」ということです。アーチェリーなどで、矢を放って的外してしまった、と言う時に使います。神という基準、その的外したということです。神の栄光に追いついていない、自分はそこから離れてしまった、ということです。そして三つ目は「咎」です。これは、罪を犯してしまったことで自分がもう駄目になってしまったことを意味します。ですから、神の命令を知っているのに、自分は敢えて異なる道を選んだという背き。そのために、自分が神の栄光から外れている、そこに達していないということ。その結果、自分が罰を受けるべきどうしようもない人間になっている、ということです。

そして、ダビデは「赦される」ことについても、三つの表現を使っています。「赦す」というのは、「降ろす」という意味があります。罪を犯したことは、負債があるのと同じです。その負債が帳消しにされました。あるいはその重荷を他の人が身代わりになって受け取りました。そうすると、赦しが与えられます。ですから、そこには対価があります。例えば誰かの家に損害を与えたとして、その被害者が被害を請求しなければ、その被害者が対価を代わりに引き受けたこととなります。これが赦しです。イエス様が、十字架の上で私たちの罪の対価を背負って下さいました。

そして、「罪を覆う」という表現が二つ目にあります。これは、罪を隠して、神にも見せなくさせるという意味があります。これは旧約時代における、罪の赦しの方法です。ヨム・キプール、贖罪日を守っていました。その時、大祭司が年に一度、神の幕屋の至聖所に入って、贖いの蓋に血を振りかけます。贖いの蓋の下には、十戒の石の板がありますが、その戒めを破ったことについて人は

死ななければいけません。しかし、主がその蓋によって敢えてその罪を見ないようにする、つまり罪を隠すようにされます。そして新約時代には、神は罪を覆ってくださっただけでなく、ご自身の内で罪を取り除いてくださいました。キリストが十字架の上で死なれたことによって、罪を私たちのから取り除いてくださったのです。

2B 数えられない咎 2

それから、「認めない」という言葉が三つ目にあります。これは数える、みなす、という言葉です。会計の記録として残さないという意味合いがあります。ですから、神が私を見る時に、その咎をものは見ておられない、数えておられない、記録しておられないということです。これを使徒パウロが、「義と認められる」という言葉で言い表しています。なんと幸いなことでしょうか、まるで罪を犯したことの無い者のようにみなしておられるのです。

ですから、罪意識で今、苛んでいる方がおられるかもしれません。そして、それに直視しなくなっただけかもしれません。けれども実際は、その罪が死をもたらし、死後に裁きを受けるように定められているのです。自分の罪とその後の地獄の火を感じているかもしれません。けれども、抹消されたのです。神の大きな裁きの座に出て、そこで行いの書物が開かれた時に、自分の犯した罪が書き記されていません。「ええ、悪い政治家が、後ろで動いて警察のデータを抹消したの？」いいえ！正当な方法で抹消されました、ご自身の御子キリストが罪を取り除いたので、記録にさえ残っていません。

しかし、このように考える人がいるかもしれません。「だったら、何でもできるんだね。その後で何をやっても神に赦してもらえるんだから。」そのような人は、まだ神の子どもとされていないでしょう。なぜなら、「主を恐れることは悪を憎むことである。(箴言 8:13)」とあります。罪に死んだ私たちが、罪の中になぜ生きることができるのか？とパウロは言っています。また、だれでもキリストのうちにある者は新しく造られた者で、古きものは過ぎ去ったのです。

2A 神の重い御手 3-4

そして、ダビデが罪を隠していた時のことを次のように表現しています。「3 私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。4 それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。セラ」

ダビデは、心が、いやそれ以上の骨々において、骨髓において、疲れ切っていました。体がぼろぼろになるという言葉がありますが、骨々が干からびてしまったのです。詩篇 38 篇 3 節にも、こう書いてあります。「あなたの憤りのため、私の肉には完全なところがなく、私の罪のため私の骨には健全なところがありません。」私たちは、外見や体に必要以上に気にかける世間に生きています。中身を見せないようにして、表を繕って生きようとします。しかし、聖書は、人にはそんなことはできないことを教えます。自分の霊が神に罪を犯していたら、思いにも体にもその症状が表れます。

体全体が疲れて、内側はカラカラになってしまうのです。

「一日中、うめいている」とダビデは言います。罪を犯すと楽しみがありますが、束の間で終わります。モーセがエジプトを出たことについて、ヘブル書の著者はこう書きました。「はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。(11:25)」一時的なスリリングを味わうために車のスピードを上げた若者が、その後、ずっと床に伏していなければいけないのと同じように、自分の犯した罪は一時も離れることなく、自分を蝕むのです。

罪意識は、人間を神経過敏な行動に駆り立てます。その罪が罰せられなければいけないという意識が潜在的にあるので、理性的ではない、あるいは合理的ではない行動を起こします。敢えて、自分が罰を受けるように自分を仕向けてしまうのです。問題行動を起こす子供に、よく見る傾向ですが、大人であってもその傾向を持っています。

回心する前のパウロ、特にステパノの説教を聞いた後の彼は、恐ろしい行動をしていました。キリスト者であれば、いかなる暴力も厭わずに行いました。次々と捕縛していきました。今でいうテロリストであり、また迫害者です。復活のイエス様がパウロに現われた時にこう言われたのです。「とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。(使徒 26:14)」農耕をする時に、言うことのない牛を御する時に「突き棒」を使ったそうです。片方は先が尖っています。牛が言うことをきかなくて蹴ると、その尖った部分が脚の肉に刺さるそうです。だから、抵抗すればするほど痛くなります。それをパウロが行っていました。彼の激しい迫害は、むしろ自分の良心はステパノの説教によるイエスの福音に対して同意をしていたのに、それに抵抗して激しく迫害していたのです。そして罪を犯した後も、同じようにして自分の良心の呵責に対して抵抗することで、ますます心が痛めつけられることとなります。

ダビデはこれを、「神の重い御手」と表現しています。神がこの悲惨な状態を造ってくださっているという点は重要です。神は私たちをととも愛しておられるので、私たちが罪の中で滅びることを望んでおられません。ですから、罪から離れることができるように、神は罪を犯しているご自分の子に重い御手を置かれるのです。

3A 罪の告白 5

しかし、罪の告白はそこからの解放を与えます。「5 私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。セラ」

1B 隠すことの辛さ

罪の赦しを得るのは、この「咎を隠さない」、罪を言い表すことが必要です。「箴言 28:13 自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。」罪を

そのまま言い表すのは難しいです。私たちの自尊心、プライドが許さないからです。「私は悪かったです。でもね、こうこう、こうだから・・・」と言って、弁解するのです。「私は悪かったです。」で終わらないところが、問題なんですね。罪を告白するとは、自分のしたことについて他の誰のせいにもしないことです。

そして、罪を少し隠すと、それが雪だるま式に大きく隠さなければいけなくなります。ダビデが、バテ・シェバとの姦淫の罪を、彼女が妊娠したという時点で告白せずに、隠しました。それで、もっと大きな罪に発展しました。自分のプライドを捨てて、そのまま自分の罪を言い表します。そうすれば、すべての罪から私たちを清めると神は約束してくださっているのです。「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(1ヨハネ 1:9)」

ある注解に、とても興味深いことが書かれていました。「隠す」という言葉が実は、二つ出てきています。1節の「罪を覆う」という「覆う」は「隠す」とも訳すことができ、そして今、「咎を隠しませんでした」とあります。同じ隠す行為なのです。しかし、私たちが自分の罪を隠している時は、苦しみをもたらします。けれども、自分の罪を神に隠さずにいるなら、神は優しくそれを隠してくださるのです。そこに幸いが訪れるのです。自分の負い目は自分には負いきれないのです。けれども、神はキリストにあって、私たちの負い目を負うことがおできになるのです。

2B 一瞬の赦し

そして気づいていただきたい言葉は、「すると」であります。ダビデが自分の罪を告白したその瞬間に、主が彼の罪を赦してくださったのです。ダビデが、「私は主に罪を犯した。」と言ったら、ナタンが「主も罪を見のがしてくださった。」とすぐに宣言したことです。

神はすぐに罪を赦してください。先ほど読んだヨハネ第一の手紙には、「すべての悪から私たちをきよめる」とありました。イザヤ書 1 章 18 節には、こうあります。「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

私たちは罪の赦しについて、少しずつ赦されると思ってしまう。例えば百の罪を身っているならば、初めに罪の告白をした時に十までは赦されている。しかし、残りの九十の罪は赦されずに残っている。その償いをこれからして、苦行して、天国に行くまでには辛うじて赦してもらおう、というのが私たちの考える罪の赦しです。いいえ、違います！これは本当に間違った考えです。主が赦される時は、すべての罪からの清めです。一切合切を赦してください、清めてくださいます。

神の赦しは完全です。完全だからこそ、赦しが赦しになります。少し残しておくのは、赦しではないのです。ペテロがイエス様に、「人が私に罪を犯したら何度まで赦すのですか。七回までです

か？」と尋ねたら、イエス様は何と、「七の七十倍までと言います。」と言われました。七の七十倍、つまり数えているうちに忘れるほどの回数を、赦しなさいということです。完全に赦してしまうことです。その赦しをもって神は、私たちが罪を告白する時に赦してくださいます。

いかがでしょうか、罪の責めを今、受けておられる方がいれば、どうか主の前に出てきてください。こんなことをなぜやってしまったのか、なぜ言ってしまったのか、後悔してもしきれないことがあるかもしれません。その思いがいつもよみがえって、自分を苦しめているかもしれません。主の前に出ましょう。そのままの自分で出ましょう。繕ってはいけません。2 節に、「心に欺きのない人」が幸いであるとあります。そのままの汚れた自分を持っていきましょう。そして、そのままの汚れに満ちた自分が、全く新しくされます。この赦しの力と権威を持っているのが、私たちの主イエス・キリストなのです！ イエス様は、「子よ。あなたの罪は赦されました。」という権威を持っておられます。今、イエスが戻ってこられて、この方前に出ていく時も、汚れなく、傷なく、責められるところのない者として出るように守ってくださいます。